

青年部がやるべきこと ～島の魅力発信 将来に繋ぐ私たちの思い～

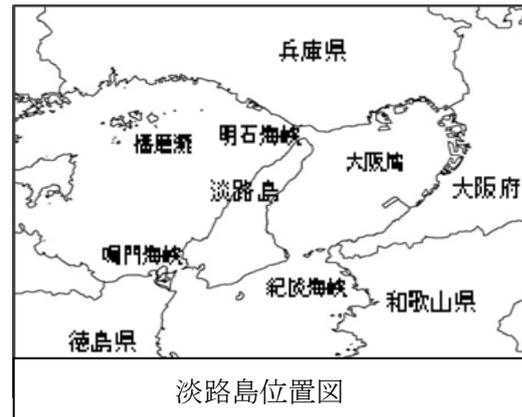
淡路地区漁協青壮年部連合会
会長 山崎 大輔

1. 地域の概要

淡路島は兵庫県の南部に位置し、周囲を大阪湾、紀伊水道、播磨灘の特性の異なる3つの海域に囲まれた、古くから漁業が盛んな地域である。

また1年間を通して温暖な気候であることを利用し、玉ねぎやレタス、白菜など数多くの農作物も生産されている。

こうした豊かな食材に恵まれた淡路島は、古くは「御食国（みけつくに）」として農水産物を朝廷に献上していた歴史があり、現代でも大消費地である京阪神地域への食料供給基地として重要な役割を担っている。



2. 漁業の概要

島内3市では、17漁協に所属する約2,000人の組合員らによりそれぞれの海域に応じた漁業が行われている。島の主要な漁業種類は、漁船漁業では小型漁船による船引き網漁業、底引き網漁業であり、そのほか刺し網漁業や小定置網漁業、一本釣り漁業なども行われている。魚種別生産量では、全国1位であるシラスをはじめ、イカナゴ、タコ類、マダイ、ハモ、サワラが有名であり、養殖業では、全国2位の生産量を誇るノリをはじめ、ワカメ、トラフグなどが生産されており、島内3市での漁業生産額は約157億円（平成27年）と県下の約36%を占めている。

シラス・イカナゴを漁獲する船曳網漁業



3. 研究グループの組織と運営

淡路地区漁協青壮年部連合会（以下、漁青連）は昭和50年に結成され、現在は淡路島内にある17の単協青壮年部を会員とし、そこに所属する262人の部員により構成されている。本会では、漁協の協力組織として青壮年部員の教養を高め経済的・社会的地位の向上を図ることを理念に「学習会」「視察研修会」「食育活動」を中心に活動を行っている。

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

近年、淡路島の水産業は大きく変化した。漁獲量の減少や燃油の高騰等により、漁業者は減少し高齢化も進み、青年部員も減少している。また、漁家経営が厳しくなる中、漁業活動の合間に単協青年部の活動に参加するのが精一杯で淡路地区漁青連の活動に参加できる人も減っていった。そんな中で、定期的な活動は行っているものの、マンネリ化していた。

このままでは淡路地区漁青連の役割や存在意義が曖昧になってしまうと感じ、改めて活動の目的や内容を考え直すこととした。

現在、淡路島を盛り上げようとさまざまな団体が多くのことに取り組んでいる。例えば、淡路島への観光客の誘致は、明石海峡大橋の完成以降、関西地方の観光スポットとして行政や企業による積極的な取り組みが行われている。また、島内の水産物PRに行政や観光協会、漁協が連携し「淡路島の生シラス丼」「淡路島の生サワラ丼」「3年とらふぐ」など多くのブランド化が進められ、淡路島のPRに水産物が大きく貢献している。

また、食育活動などの取組は、兵庫県漁連がオール兵庫で活発な活動を行い、島内では女性部や単協青年部が料理教室を頻繁に行っている。このように島の水産物のPR、島内外での水産普及活動はすでに行われており、観光客も順調に増加している。

そんな中で、『淡路地区漁青連としてできることは何なのか』『淡路地区漁青連としてやるべきことは何なのか』を課題として進めていくこととした。

5. 研究・実践活動の状況及び効果

(1) 活動までの討議内容と平成29年度の取り組み

多くの団体によるさまざまな活動は、「観光客に向けた水産物のPR」「島内住民に対する食育活動」に分けられる。これに対し青年部がやるべきことは何か。上記以外の新たなことをやるべきかなど、検討を進めていたところ、「洲本市農業青年会議（以下、青年会議）」から1次産業に従事する者同志何か一緒にできないかという提案があった。

この青年会議も各種イベントの開催に取り組んでいたが、活動のマンネリ化や会員の減少など、私たちと同様の課題を抱えていた。同じような境遇の両団体はお互いの活動内容や課題を共有する会議を開催した結果、意気投合し農業と水産業の若手生産者による異業種間連携により活動をすることになった。

会議を重ね、販売イベントをやる方向となる一方、お互いが魚や野菜の食材を持ち寄った料理会や高校での出前授業、料理教室なども行った。しかし、高校での活動を通し、農業関連コースもある高校の生徒ですら淡路島の一次産業に対する知識が低いことに大きな衝撃を受けた。これを受けて、「淡路島の1次産業の魅力発信」を目的とした活動を行っていくこととした。

第1回イベントでは、「地元住民に漁業や農業に触れてもらうこと」をテーマとし、タッチングプール、漁船クルージング、干しだこづくり、農産物の物販などでイベントを単独で開催した。

イベントの単独開催の背景には、これまで多くのイベントに出店してきた経験から、参加することが目的となることも多くなってきていたので、自分たちだけでイベントを

企画し、どうやって1次産業に触れてもらうかを徹底的に考え開催することとした。

結果、来場者全員が何らかのイベントに参加し、漁業と農業に触れてもらったことに対してはこれまでにない満足感を得られた。一方で、来場者は思ったよりも少なく、集客活動の難しさを痛感した。

集客が難しい課題に対しては、人が集まる場所での開催に方向転換し、1次産業に触れてもらう部分は別の形で行うこととした。

また、会議を重ねるうちに、農業者から料理教室で食べた美味しい魚を買いたいのに、地元のスーパーであまり淡路産の水産物が販売されていないことを指摘された。

調べると確かに地元の魚がスーパーにはあまり流通していない。でも、地元の魚を販売する魚屋が淡路島には多くある。この時に「生しらす丼」「生さわら丼」「淡路島牛丼」などはマップやホームページを各協議会が作成しPRしているため地元住民にも認識されている。一方で、地元の魚が買える魚屋は何も行われていないことに気付いた。地元の魚が買える魚屋を周知させる必要があるのではないかと考え、「淡路さかな屋まっぷ」を作成し、会議の中で農業者の方に披露したところ、高評価を頂いた。そこで「淡路さかな屋まっぷ」で地元の魚屋をPRすることが自分たちのやるべきことのひとつだと確信した。



単独イベント（漁船クルージング）

（2）平成30年度の取り組み

第2回周知イベントは、前回の反省点を考慮し、淡路島で人が集まるところを調査し、開催場所は明石海峡大橋を渡ってすぐのサービスエリアで開催した。ここは、高速道路からの入場だけでなく、一般道からも入場でき、観光客に加え、地元住民も来場が可能となっている。

イベント内容は、今回もタッチングプールで漁業に触れてもらうとともに、

「淡路さかな屋まっぷ」の配布を中心に各種冊子による淡路島の情報発信を行った。

一方農業では、「玉ねぎ重さ当てチャレンジ」を行ってもらった。単に参加してもらうだけでは効果も薄いので、アンケートの回答を参加要件とし、淡路島に来る目的や、頻度、年代、住所等を調査することとした。

今回のイベントは開始直後から常時人だかりができ、特にタッチングプールは子供から大人まで大人気であった。「玉ねぎ重さ当てチャレンジ」も多くの方々に参加してもらった結果、アンケートも想定を超える回答数が集まり、のべ270人から回答を得られた。その他「淡路さかな屋まっぷ」も高評価を頂き、実際にマップに記載されている店



大好評だった玉ねぎ重さ当てチャレンジ

に行くや次回は行ってみるという声も頂けた。

今回は、前回とは比べ物にならないくらい多くの方が漁業や農業に触れていただけただことに手応えを感じた。課題としては、多くの時間で行列ができており、会場設営における動線や配置などの検討が必要だと感じた。また、予想以上にアンケートが回収できたことからもう少し質問の内容を充実させたいとの意見があった。

第3回周知イベントは、前回と同じサービスエリアで開催し、同じ内容で行ったが、「重さ当てチャレンジ」は玉ねぎではなく、旬を迎えるみかんで行った。前回課題となったアンケートについては、特に淡路島のイメージについて掘り下げることとした。回答数は前回より増加し、のべ300人から回答を得た。今回は年間を通じて観光客が比較的少ない時期での開催だったが、両団体ともに非常に満足のできる結果となった。

サービスエリアによる計2回のイベントは大盛況であり、多くの方々から「次はいつ開催するの?」「定期的で開催してほしい」といった意見を数多く頂いた。今後もこのようなイベントを定期的で開催し、多くの人へ周知することが今後の淡路島のにぎわいへとつながるだろうと考えている。



行列ができた第3回目のイベント（タッチングプール、お魚マップ配布時の行列）



16 魚増水産

一匹から購入可!
その場で食べれます!
住所:淡路市富島1146
TEL:0799-82-0609

焼あなご 400円 / 皿~600円 / 皿

18 魚竹鮮魚店

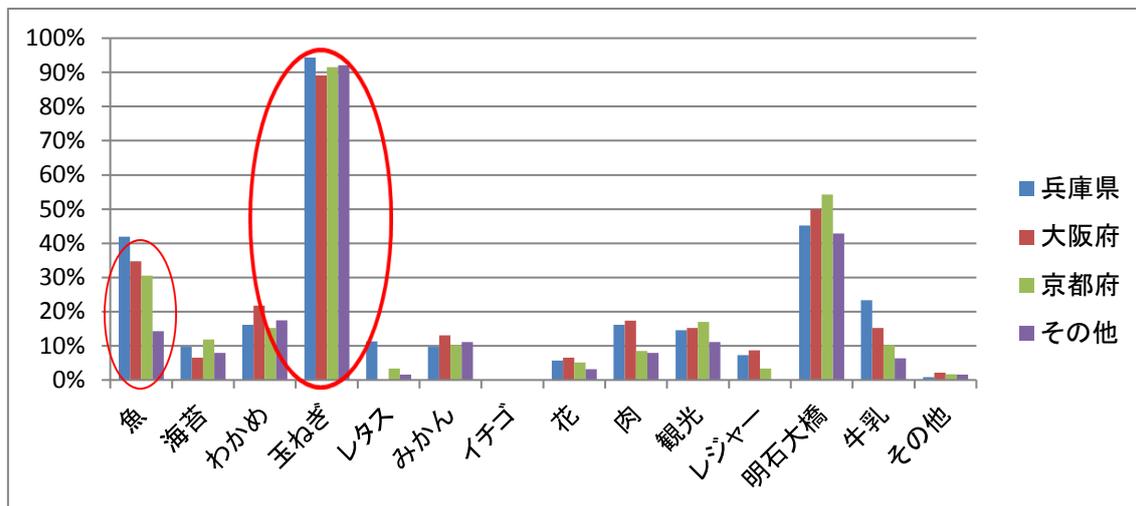
「海鮮どんや」も経営!
住所:淡路市富島584-1
TEL:0799-84-1120

海鮮丼 1,350円~

「淡路のさかな屋マップ」
右…掲載内容の一部
左…表紙紙

(3) アンケート結果の分析

計2回のイベントで、延べ570人からのアンケートを取ることができた。特に印象的だったのは「淡路島の観光の目的」で淡路島に観光に来た約半分が食事目的であったこと。そして「淡路島に対するイメージ」というアンケートの回答である。以下はそのデータをグラフにて示したものである。



第3回目のアンケートを分析 (内容は淡路島に対するイメージ)

「淡路島に対するイメージ」といえば、予想を超える9割が「玉ねぎ」と回答された。それに対し、魚介類は予想を下回る回答に終わった。「魚」に関しては県内でも42%、であった。現在も京阪神地域に多くの水産物を供給する食料供給基地にもかかわらず、ここまでイメージが少ないということが分かり、正直ショックだった。

アンケートが予想以上に回収できたことや、農業・水産業ともに玉ねぎ以外のイメージの低さが分かったことは大きな成果であった。このイベントを活用した観光客のデータ収集も青年部ができることだと確信した。

6. 波及効果

サービスエリアからは、イベントについてとても魅力に感じているため、今後も定期的に開催してほしいという意見を頂いた。われわれとしては、島内において最も多くの人立ち寄るサービスエリアの一角を利用させていただいていることから、サービスエリアとWIN-WINの関係でイベントを開催することができている。

また、2回のイベントで得られたアンケート結果の提供を求められていることから、観光客の情報の必要性はもちろん、集めることの難しさが分かった。

7. 今後の課題や計画と問題点

今後の課題は、アンケートによる情報をより多く集めること、集めたデータを有効に使うため、内容が妥当なのか、どういう形で情報提供するかということである。

しかし、イベントを開催しなければアンケートは実施できない。サービスエリアでイベントを行うだけでは、ありきたりな一過性の活動で終わってしまう。そうならないためにも、調査結果を活用し、定期開催ができるよう改善して行くことが必要である。

一方で、サービスエリア以外での活動も必要と考えている。アンケート結果で圧倒的な知名度の「玉ねぎ」を利用し、玉ねぎを販売している施設での水産物のPRや、玉ねぎに相性の良い魚介類やレシピ紹介等を通じたイベントが必要である。また、アンケート結果で観光の目的が「食事」だったことを受け、淡路島の農水産物を使った「オリジナルコラボメニュー」の開発も計画している。レシピ作成は、地元高校生を巻き込み新しい発想や、知られざる一般家庭の食生活をヒントにするなど、島の若者と農業者、漁業者が知恵を出し合って1つの商品を作り上げたいと考えている。

「淡路さかな屋まっぷ」では市町村ごとの地域版やイトインもできるような観光客版などさまざまなニーズに対応できるマップ作りが課題と考えている。それらは、ともに活動する農業者やイベントでの反響を確認しつつ試行錯誤しながら作成していきたい。

また、1次産業に触れてもらうということに対しては、高校の授業で農業や漁業を体験・見学してもらうこととし、すでに農業ではみかん農家での体験を行っている。今後は漁業版も予定しており、毎年開催してもらえるよう魅力ある体験授業にしたいと考えており、最終的には観光漁業へつながればと期待している。

このように、農業青年会議との異業種間連携により、これまでに無かった意見や提案があり「淡路さかな屋まっぷ」と「観光客のデータ収集」が一次産業の盛んな淡路島における漁協青壮年部が現在やるべきことと考えて始めた新たな活動によりマンネリ化も解消しつつある。

当初は、洲本市内の若手農業者だけであったが、現在は、淡路島の各地に広がり、今後は野菜や果物だけでなく、花や牛乳を生産する若手農業者も巻き込んだ異業種間連携を行い、その中で新しい「青年部のやるべきこと」を見つけていきたいと思う。

しかし、性急な活動の展開は部員に大きな負担をかける事にもなりかねないため、バランスには注意が必要であると考えている。

青年部には、「青年部にできること」つまり「身の丈に合った活動」を長く続けていく事にこそ意味があるという考えがある。部員がやりがいを持って、楽しみながら継続して取り組める活動にしていく事が今後の最大の目標ではないかと考える。